

伊勢紀行についての覚え書

白井忠功

1

中世紀行文学のなかで、伊勢への紀行を記した作品について若干の考察を試みたい。素描的な叙述であるが、今後詳細な検討を行なうための覚え書としたい。

さて、伊勢への紀行を主題とした作品には、

- 1 『伊勢記』鴨 長明（建久元年一一九〇）
- 2 『太神宮参詣記』坂 十仏（康永元年一三四二）
- 3 『耕雲紀行』耕雲（応永二十六年一四一九）
- 4 『室町殿伊勢参宮記』未詳・耕雲又は飛鳥井雅縁（応永三十一年一四二四）
- 5 『伊勢紀行』堯孝（永享五年一四三三）

などがある。これらの作品はいずれも伊勢参詣の旅を記述をしたものである。その旅立ちの動機も、自発的なもの（長明・十仏）、外発的なもの（耕雲・堯孝）がある。また、その旅の形態から、前者を個人的な旅、後者を集団的な旅ともいえよう。

小稿は、自発的な旅立ち、個人的な旅を記述した『伊勢記』『太神宮参詣記』について私見を述べてみたい。

2

自分から思い立って旅に出る自発的な行為には、何等かの理由が内在しているのは確かである。鴨長明の場合は、事志と違った立場にあって、都から脱出の思いで伊勢へ旅立ったものか。西行法師を慕い、自由への憧れがあったものか。漂泊の思いにとらわれた旅であったものか。西行法師が旅に出るのは、浮かれ出る心であるといわれているが、それも単純な動機からでないのは明らかである。

長明も、西行法師の旅立ちに似た思いであったろうか。旅に出ることが自己を生かす術であると信じていたのであるろうか。旅のなかで自己を凝視し、問いかけ、感傷に沈み、旅情を覚え、自己を知ることが必条であった。そこには伊勢神宮へのひたすらな信仰とは異質な思い、私的欲望といえるような旅ではなかったか。彼の『伊勢記』⁽¹⁾は早く散佚してしまい、その原形を詳しく知ることはできない状態である。ただ『未木抄』巻第十一に、「此歌伊勢記云々」としてその逸文が十数条引用されており、また、『本朝書籍目録』にも「蓮胤伊勢記一卷」とあるなど、長明の伊勢紀行の記として信じられているのである。なお、後藤丹治氏によって神宮文庫に『伊勢記拔書』のあることが紹介されている。その上、築瀬一雄氏が、文治二年（一一八六）七月頃から同年の秋の末らしいこと、証心法師と同道したらしいこと等を挙げておられる。これらのことから勘案しても、長明筆の『伊勢記』のあったことが知られるのである。

彼の旅立ちの動機についても不明ではあるが一説には、隆円法師の『文机談』の記事（長明がひそかに琵琶の秘曲啄木を弾じた罪によって伊勢に下ったという）が理由とされているが、真実性がないと思われる。では何故、伊勢へ旅立ったのか確証は得られないにしても、西行法師を慕っての旅立ちという推測はされているのである。長明二十九歳の頃、歌人六条源家の俊恵門（歌林苑）に入り、歌人としての修行に全力を傾け努めていたのである。俊恵は既に七十歳を越えており、彼がこの師について学んだのは短かい期間であったと思われる。例え短かい間の師事であれ、俊恵の隠者的歌人の風格に強い影響を受けたのは、後年、彼が隠者的性格の強い芸術家として、様々な作品を書き記したことからもうかがうことができるのである。師俊恵歿後、師の由縁の地（俊恵の父俊頼が晩年伊勢齋宮に仕えていた）伊勢へ旅立ったのである。文治二年（一一八六）、長明三十二歳であった。もちろん和歌修行の旅であろうが、西行法師へのひたむきな思いもあったといえよう。長明が伊勢へ下る少し前まで西行法師は彼の地に滞在していたのである。⁽³⁾ また、当地は和歌には相当に因縁深いところであり、伊勢神宮の神官たちをはじめ風雅の人たちが西行法師から和歌の心を教えられていたことは、後の『太神宮参詣記』にもみられる。長明も、⁽⁴⁾

西行法師すみ侍ける安養山といふところに人々歌よみ連歌などし侍りしとき、海辺落花といふことをよめる
秋をやく神崎（嶋）山は色きえて嵐のすゑにあまのもしほひ

と詠歌を記しているのである。西行法師旧居跡の歌合の模様である。

さて、『伊勢記』⁽⁵⁾は、京から伊勢への紀行と、二見滞在の記と二部に分けてみることができる。前半の伊勢への紀行は秋で、野路・石部・横田山・大野の原・鈴鹿山・みせ川・いづみ野・甲斐川・弓削村・星川・浜村・阿濃・くるま・

阿古木島・三渡・斎宮跡・竹河・山田に到着。道中諸処において詠歌を試みているが神宮の詠歌はみられないのである。後半の二見滞在の記は、自然の景物を詠み、叙述し、さきにみた西行法師の安養山旧居跡で歌会を開いたりしている。本文からうかがえるのは、後半の日記の部が本書の大部を占めていたのではないかと考えられる。紀行より日記的な内容といえようか。彼の詠歌には、

伊勢人はひがごとしけり津島よりかひ川行けばいづみの原

時ならでまたもさくらの花ざかり春をふたみといふべかりけり

などがあり、即興的で言葉の技巧、遊戯的な面をみることができる。

宮川の末わたりに水ののぼりに流るる様にみゆるを、爰はいつくかと云ふ、などかく水はのぼるぞといへば、或人塩のさすとして水さかのぼるなり、爰はみそかせなん申すといふをききて

さか塩はみそかせませてさし登るすを過ぎて行く人に問はばや

の詠歌のなかに、酒・塩・味噌・酢とならべて新奇をてらう技巧があり、滑稽味溢ふれるものがあって面白い。

長明の『伊勢記』は、その全貌を容易に捉らえることはできないまでも、今伝わる逸文のなかに、如上の様な事柄を読みとることができるのである。

文学的なものとしては左程の評価を与えることはできないまでも、彼の三十歳頃の旅の事情（体験）を知る上にも

貴重なものであることはいえよう。隠者への志向はあれ、その内面的なものが、未だ熟していない点は指摘できよう。伊勢参宮の最初の文学作品として注目すべきである。

3

坂十仏の『太神宮参詣記』⁽⁶⁾は、

康永元年十月十日あまりの頃、太神宮参詣のころざしありて、伊勢のくに安濃津と申ところに着て侍りし程に、故郷にて聊見侍りし人とどめ申しかば、旅の心をもたけむとて、両三日逗留し侍りぬ。

の書き出しで始まる。「康永元年（一二四二）十月十日あまりの頃」以降の月日についての記述は見当らない。なお末文には、

帰路のみちにおもむく日、故郷人の家づとにと、紙のうへにすみをつけて、袖の内の宝となしぬ。一隅を守る筆作のつたなき事をはぢざるにはあらず。両宮をあがむべき記録のたつとき事をしらしめむがためなり。

とあり、「家づと（家苞）」として書いたものであるといっている。作品の成立もその年内であろう。作者十仏は「太神宮参詣のころざしありて」伊勢へ下ったのであった（傍点私）。ところが、扶桑拾葉集、群書類従、その他刊行写本には作者を坂士仏としているのである。士仏は十仏の子である。士仏は康応元年（一二三九）の『鹿苑院殿巖島

詣記』に扈從しているが、『太神宮参詣記』に「六旬の齡」とあることから年代的に合わない点がある。(四十七年後の康応迄生存し長途の旅をしたと考えられない)。また、度会常彰の『太神宮参詣記纂註』に、本書最初の歌「かせ寒き磯やのまくら夢さめてよそなる波にぬるる袖哉」が『新後拾遺集』(二条為重撰・永徳元年一三八一)に十仏の作となっていること、その上、本書中に「山田の三宝院にかへりて侍りし程に、当所の好士あまた尋きて一折あらまほしげにすすめ侍りしかば、手向の心ざしあるおりふしなり」とある様に、連歌会を催していることから、連歌をよくするの十仏であり、連歌師善阿門下の高足であった。⁽⁸⁾

以上の理由から『太神宮参詣記』の作者は、士・仏の父・十・仏であるのが正しいのである。十仏は、医師であり、和歌に通じ、連歌師としても善阿門の高弟であった。子の士・仏も父親と同じく医師として知られ、足利義満に仕えた。また詩歌に堪能でもあった。

さて『太神宮参詣記』についてみてゆきたい。本書は、内容から二部に分けることができる。前半は、康永元年十月十日あまりの頃、伊勢の国安濃津に着き兩三日逗留。その後、あこぎが浦・雲出川・三度の浜・櫛田川・斎宮跡をすぎ、山田の三宝院に到着。その夜外宮祠官村松家行に逢い、伊勢神道(度会神道とも)を聞いているところまでをいい。後半は、翌日、外宮内宮を参拝して、朝熊の宮に参り、二見の浦・江寺・安養山の西行旧跡を尋ね、その夜三宝院の連歌会に出席したところまでの記事をいう。

前半部における旅の叙述は、全体からみても極く一部分であり、その大部分は伊勢神道の聞き書きで占められている。

旅中に詠んだ和歌三首、漢詩(七言絶句)一編がみえる。(数字は詠草順)

- 1 かせ寒き磯やのまくら夢さめてよそなる波にぬるる袖哉（安濃津での詠草）
- 2 うきしつむこのみを思ふくるしみの海に汐ひの山は有ける（三度の浜での詠草）
- 3 はかなしといつれをわきて思はまし夢もうつつもおなし世中（齋宮跡での詠草）

1は「この浦は江めぐり浦はるかにして、ゆききの船人の月に漕こゑ、旅泊の暁の枕にきこえて、あらき浪風の音しのびがたく」の叙述があり、旅愁の感懷ぶかいものがある。この詠歌は、さきに記した様に、『新後拾遺集』羈旅の部に入集しているものである。2は、「西にかたぶく日影には、終にゆくべき我身のあらましもまぢかく、汐のみちひのときのまにかはるをみては、生死のみちは海にもありと詠たる古集の歌をおもひいでて」詠んだものである。旅中における自己凝視であり、感傷的な気分がうかがえる。一種の仏教的無常観ともいえようが、それも教養的なものと思われるのである。潮の引く間の休息の折りに、次の様な漢詩一編を作っている。

渡口無_レ船憩_二樹陰_一 漁村煙暗日沈沈

寒潮帰去途程近 又有_二松濤驚_二客心_一

「心にうかむことを口にまかせて申すてぬ」といっている。即興の詩であるが、状景描写と心象を併せ詠んだ平明な詩といえようか。「又有_二松濤驚_二客心_一」とは旅情の思いか。また、3は「齋宮にまいりぬ。いにしへの築地のあととおぼえて、草木の高きところどころあり。鳥居はたふれて朽のこりたる柱のみちによこたはれるを人だにもかくとし

らせずは、ただふし木とのみぞ見てすぎなまし。齋宮と申はたえてひさしき跡なりしを」と荒廃した齋宮の傷ましい様子を物語っている。

西行法師の『山家集』下、雑の中に、

伊勢に齋王おはしまさで、年経にけり。

齋宮、木立ばかりさかと見えて、築垣もなきやうなりたりけるを見て

いつかまた齋の宮の齋かれて注連の御内に塵を払はん

とみえる。齋宮⁽⁹⁾は源平の合戦以降衰微の一途をたどり、鎌倉末期の後醍醐天皇の時、制度的に廃止されたのである。

十仏の詠む夢の歌は、『伊勢物語』第六十九段の世界（齋王と狩の使）に思いを馳せている様にみえる。

山田の三宝院の僧坊に旅宿を求めたのち、外宮祠官村松家行卿（従三位）を訪れて「神代のむかし垂跡のいまを尋ね申」したという。その際、家行卿は何等記録を開いて見ることなく質問に答えたのである。十仏も「年頃^(来イ)の不審は雲霞の風に散るがごとし」と理解できた様を記している。また、彼は家行卿の風貌や態度人柄、言辞について「霜の眉雪の鬚、顔氣時にあひ、心の水ことばの泉、弁舌むかしをうかぶ。まことに太神宮の祠官なりと有がたくおぼえ侍り」と賛嘆している。伊勢神道（度会神道）の大成者家行卿の説くところを、十仏はよく理解し口語で表現し、何人にも理解し易い様に記録している。その最初は、

抑内宮御鎮座は垂仁天皇の御宇也。外宮御垂跡は雄略天皇の御代也。数百歳の前後なりといへ共、参詣の次第に

よりて先外宮御垂跡のことを記す。当宮をば天照豊受太神と申すなはち月神なり。云々。

とある。十仏は「終夜の閑談を忘れぬさきにとて、草案にも及ばず筆にまかせて是を記す」といっており、なかなかの氣力をみせている。

内宮（天照大神）鎮座は、『日本書紀』垂仁天皇⁽¹⁰⁾二十五年三月の記述に詳しい。また、外宮については、『古事記』『日本書紀』にもほとんど記述がない。外宮鎮座⁽¹¹⁾についての最も古い記録は、延暦二三年（八〇四）成立の『止由氣宮儀式帳』である。そこには、雄略天皇の代に、天照大神の告げに従って天照大神の食事を司る神として丹波の国の比治の真名井の等由氣大神を伊勢の度会に遷したとある。なお天照大神を祀る内宮は、五世紀末には現在の地に鎮座していたと考えられる。そして、その地方の豪族であった磯部氏がその管理を行っていたようである。和銅四年（七一一）に度会の姓を賜わり、伊勢神宮の禰宜として公に認められてゆくのである。外宮祠官長官である行家卿の説にも「当宮御垂跡の始をたづねれば、雄略天皇の御宇、天照太神大佐々命に勅りし給ひて、天照豊受太神を我国へ移し奉れと示したまひしかば……」とその遷座の次第を述べている。十仏は、「感涙とどめがたく侍しほどに、聊古語の風情を学びて、愁に今案の詞露をしたつ」といい、万葉仮名による長歌一首、反歌一首を詠んでいる。長歌を「奉^レ讚^ニ外宮天照豊太神^ニ歌也」、反歌を「奉^レ題^ニ豊宇賀能売神^ニ歌也」と記している。反歌に詠んだ「処女子之 友爾別而天原 振離津久流 昔悲聞」は、「豊宇賀能売神」のことであって、本文にもその部分が引用されている。丹波国の川辺で水浴をしていた天女八人のうち一人の天女の衣を老翁がとりかくし、その天女はしかたなく老翁の子となり、家の貧しいのを哀れんで酒を造って売ったところ、その酒を飲むと万病が直り、老翁の家は豊かになった。すると老翁は天女を追い出してしまった。天女は昔を忍び今を悲しんで「天原 振離見者 霞多地 家路麻余伊豆 行做不^レ知

聞」と詠んだのである。この天女が神明遷座のとき供をして、丹波の国より伊勢の国へ移ったという。「天女のなき
あたりけるところを奈久郡云々」とある。この天女が豊宇賀能売命であると『丹後国風土記』逸文「奈具社」^{なぐのやしろ}⁽¹²⁾にみえ
る。

また、天村雲命が祠官度会氏の祖神であり、外宮には巫女がいないとも記している。

4

では、後半の部をみてゆきたい。

月読の宮にまいり「幾年に露の玉かきふりぬらん神代の秋の月よみの宮」と詠んでいる。

山田から内宮への道中の記述も「いやしき筆のはしにてのべがたし」といいながら、風景を叙して漢詩に似た発想
がみられるのも才筆豊かな証左である。「或は水煙山をうかべて影を重溟にさかさまにせる処もあり、あるひは雲気
みちをうづみてみねを千嶺にかくすところもあり」など、和漢混淆の文といえよう。

当宮参詣のふかきならひは、念珠をもとらず、幣帛をもささげずして、こころにいのるところなきを内清浄とい
ふ。潮をかき水をあびて身にけがれたるところなきを外清浄といへり。内外清浄になりぬれば、神のこころと吾こ
ころと隔なし。既に神明に同じ。

は、度会神道の修行方法を説いた部分である。後年、村松家行卿が夢窓国師疎石に語ったところと同じである。⁽¹³⁾即ち、

伊勢太神宮には幣帛をささぐることも制し玉ふ。経咒をも読誦するをもゆるされず、我れ先年勢州に下りて、外宮の辺に一宿したることありき、其時一の禰宜といふ人に其謂はれをたづねしかば、此社に詣づる時内外の清浄あり、外の清浄とは、精進潔斎して、身を穢惡にふれざるなり、内の清浄とは、胸中に名利の望をおかざるなり、世のつね、幣帛を捧げ、法楽をなすことは、皆是れ名利の望を祈り奉らなれば、内清浄に非ず、この故に之を制し玉へり……

と述べられている。幣帛も捧げず、読誦もなく、念珠も持たず、精進潔斎の上、胸中に名利を望まずに参詣することが大切であるという。まさしく心身清浄にしてあることが真の参宮というのである。十仏も「これ真実の参宮なりと受け給はりし程に、渴仰の涙とどめがたし」と記している。

「内宮の御躰は神鏡なり。天上にて八百万の神達の鑄たてまつり給ける御鏡也」と書き、内宮の鎮座次第を記している。その時、万葉仮名による長歌一首、「奉_レ讚_二天照太神_一歌也」を詠んでいる。五十鈴川・荒祭宮・桜宮・風の宮を経た十仏は朝熊巡礼に向うのである。その間に問答が記されている。内宮は日神女躰、外宮は月神男躰であり、日神なら陽神・男躰であるべきだと問うのである。その答は、水火和合して其の徳をあらわし、神は陰陽を具足してい、日神は陽中に陰をふくみ月神は、陰中に陽をふくむという。「両宮は天地の父母として、万物を出生し給けることなり尤もふかし」を結んでいる。続いて仏教と神道との交渉にもふれており、人が神道を信じない時に、聖徳太子が世にて仏法を広められたが、それは神道の化現であるというのである。伝教大師は北嶺を開宗されたが、「一乗を七社権現の威光にかがやかし」、弘法大師は南山を開いて「三密を四所明神の徳風にひろむ」といい「仏法ひとりたらず、偏に神道のたすけによるものなり」と神道の立場を強調している。十仏は朝熊の宮（鏡宮）に参り、万葉仮名の

長短二首の詠歌を記している。その後、二見の浦を訪れ「遠浦渺々として万株の松煙対偶し、孤島峨々として百尺のいはほ月にそばだてり」と叙している。漢詩の発想はさきに指摘した通りであるが、対偶も鮮やかに使われている。江寺観音の霊地に至り、麓の浦に下って眺望を楽しみ、七言律詩一編を作っている。

浦松似^レ画夕陽裏　老眼摩挲費^ニ苦吟^一

水自^ニ細流^一通^ニ海脈^一　波横^ニ万頃^一列^ニ天心^一

雲晴雲起山高下　潮去潮来月浅深

六十余年漂泊处　江湖風景不^レ如^レ今

即興であるが、眼前に展望する風景を捉え素直に詠出している詩といえようか。「老のなみ立かへるへき身ならねば二見の浦の名をも頼ます」と詠む十仏の心は、いま二度この景勝の地を訪れたい思いがみえる。「老の身はたのみがたく、再び立ち返えり見ることができないといい、二見の浦（二度見ること）の名を頼りにすることもない」とでもないのか。彼は、「磯山かげの道をつたひ行程に、哀にこゝろすぎ古寺あり。安養山と申所也。是は西行上人のすみ侍ける旧跡とかやぞうけたまはる」と西行法師の旧跡を訪ね、昔日の面影を追慕しているのである。両宮の神官や僧侶も西行を慕い親しく和歌の教えを受けたものである。その様な風雅な思いは旧跡辺りにはなく「あしのはの冬がれたる浦かぜふきわたりて、なにはの春かと詠じけるむかしの夢のことば思ひ出し／なには江にあらぬ汀の言のはも霜かれぬれは夢かと思ふ／」と詠むのであった。「なにはの春か」とは、西行法師の詠「津の国の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風渡るなり」（御裳濯川歌合、新古今集卷六、冬歌）をいうのであろう。十仏が眼前にする風景が

「夢なれや」と感じさせるものがあつたのであろう。そして「此地空余山寂寞 昔人去後幾朝昏 緑蘿菴旧絶蹤跡」
只有松風敲寺門」と七言絶句一編を記している。「夢なれや」の感想を漢詩に詠んだものであろう。西行法師への
思慕の念がうかがえるのである。

十仏は再び山田の三宝院に帰って来た。そして当所の好士十余人と共に、両宮法楽連歌会を催した。「両宮法楽の
連歌はいまだ聞えよばず」というのであるから、十仏らの連歌会が初見ともいふべきもので、注意すべきところがあ
る。また、折角の連歌会の様子を記録していないのが残念といふべきである。

忘るなと書をく文の一筆に

といふ句の侍りしに

人のなみたをおもひいてけり

と垂髪の付て侍りしかば、諸人詠吟耳をおどろかし、満座のかむたむ腸をたつ。

の記述がみえるだけである。垂髪とは未だ幼ない年齢の者であらう。「この垂髪のよはひ、よも志学を出じと思ふ」
というのであるから十五歳位であらう。年少の者でありながら、見事な付句を詠むのに感嘆しているのである。この
様な「数寄のみちの繁昌」を嬉しく思いながら筆をおいている。

本書に詠まれた和歌十五首（短歌十二首、長歌三首。短歌のうち万葉仮名二首、長歌三首）。連歌二句。漢詩三編
（七言絶句二編、七言律詩一編）。作者十仏の和漢の才に富み、資質豊かな人物であることが知られる。その詠ずると
ころの詩歌は、いずれも感興の赴くところの即興のもので、率直で平明な点が親しみ易いといえよう。文章は和漢混

消文、対偶が多いことも指摘できる。十仏の記述した『太神宮参詣記』一卷は、紀行文学としてよりも、伊勢神道（度会神道）の解説、伊勢参宮の手引きとして珍重され、多くの人々に読まれたのであった。

注

- (1) 『日本紀行文芸史』 鳴神克巳著（S18・佃書房）第四章紀行文芸の形成、二、「伊勢記」
- (2) 『鴨長明』 日本文学者評伝全書・富倉徳次郎著（S17・青悟堂）第一部伝記篇、一、青春像(ロ)伊勢紀行。
- (3) 『西行と定家』 安田章生著・（S50・講談社現代新書）「西行・定家」略年譜。治承四年一一八〇「西行・高野山から伊勢に居を移す。63歳」。文治二年一一八六「西行、初秋の頃、東大寺大仏殿再興勸進のため、伊勢を発ち、平泉に赴く。69歳」
- (4) 「鴨長明伊勢記拔書」の成立、辻勝美著、「語文」第四〇輯日本大学国文学会（S50・3）「伊勢記拔書は、伊勢記の原本からの抜書という性格のものでなく、伊勢名所拾遺集からの抜書により成ったものであると考えられ、夫木抄、歌枕名寄の書は参考としても、さほど用いらなかったものようである」
- (5) 注1・2同書
- (6) 『太神宮参詣記』 坂士仏、群書類従・神祇部二十七所収。「跋文に右太神宮参詣記以扶桑拾葉集本校了」とあり、作者を坂士仏としている。
- (7) 注1同書第六章紀行文芸の固定、(二)太神宮参詣記。『中世の日記・紀行』 石田吉貞著、岩波講座「日本文学史」第四巻所収、五・連歌師的系統のもの。
- (8) 『落書露頭』 今川了俊著、日本歌学大系第五巻所収（風間書房）「連歌会等之事／昔、善阿といひける連歌の上手の弟子にて、救済・順覚・信昭・十仏上手なりしかど……」
- (9) 『三重の文学』 植村文夫・若松正一編（S52・桜楓社）「伊勢の歌枕」四、齋王宮。橋川博美著。
- (10) 『日本書紀』 上、日本古典文学大系所収、「垂仁天皇、二十五年—三月丁亥の朔丙申に、天照大神を豊紹入姫命より離ちまつりて、倭姫命に託けたまふ。爰に倭姫命、大神に鎮め坐させむ処を求めて、菟田の篠幡に詣る。更に還りて近江国に入りて、東美濃を廻りて伊勢国に到る。時に天照大神、倭姫命に誨へて曰く「是の神風の伊勢国は、常世の浪の重浪帰する国なり。傍国のうまし国なり。是の国に居らむと欲ふ」とのたまふ。故大神の教の随に其の祠を伊勢国に立てたまふ。因りて齋宮を五十鈴の川上に興つ。故、是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります処なり。」

- (11) 『伊勢参宮』宮本常一著（現代教養文庫・S 46・社会思想社）。一、伊勢神宮の歴史1・伊勢に祀られるまで―外宮のこと。
- (12) 『風土記』・日本古典文学大系所収。「丹後国風土記」逸文・奈良社。「丹後の国の風土記に曰はく、丹後の国丹波の郡、郡家の西北の隅の方に比治の里あり。此の里の比治山の頂に井あり。其の名を真名井と云ふ。（中略）謂はゆる竹野の郡の奈良の社に坐す豊字賀能売命なり。」
- (13) 『群書解題』第一中・神祇部仲「太神宮参詣記」（坂十仏）「家行はこれを夢窓国師疎石（一二七五―一三五二）にも語ったように、疎石の著夢中間答集にも見えている」。